

特255

832

方き書の稿原

書叢年青學文

編一第

社正中

行發

始



特255
832

「原稿を書く」といふことは、今日では、単に文筆業者だけのものでなく、近代人としての常識の一つでもあるのだ。今更、その「書き方」でもあるまいと、言はれるかも知れないが、では、そいふ人達の原稿が、果して正しく書かれてゐるか何うか。假にその原稿を印刷に附する場合、文選工の手にその儘で渡せるものか何うか。殊に雑誌や新聞に寄稿し、または懸賞募集などに応募した場合、それが何んな扱ひを受けるものか？……

編輯者、出版者としての立場から、没書籠の厄介になるものゝ多くが、その内容よりも、寧ろ「書き方」の如何にある事實を、知り悉し、見つくしてゐる我々としては、それが一般化され常識化されてゐれば居るほど、やはり正しい「書き方」を提唱し、懲慥するの、決して徒爾ならざるを痛感する。

たゞ断つておきたいのは、こゝにいふ「書き方」とは、何等作品の内容若くは形式に關することではない。單に文章を書いて行く上について、一般に心得てゐなければならぬ、「記寫の手法」を指すことである。

昭和十年初秋

著 者



文學青年叢書刊行の辭

文學に志し、藝術に精進せんとする青少年士女のための研究書や、講座のやうなものはそれこそ汗と棟充も當ならざるものがあるが、その何れも、あまりに高遠でなければ復雜多岐であり、初心者にすれば、全くパンを求めて石を與へらるゝ感なきを得まい。

本叢書は、實にその補充として生れ出たものであつて、創作に生き、思潮に棹さんとする者はもとより、苟くも近代的教養の一つとして、文學の何たるかを知らんとする者のためにも、唯一無二の手引として、將た手頃の『小文藝全書』として、確實に、十分に、その役目を果たすであらうことを信ずる。

昭和十年初秋

中正社主人

目次

一、原稿紙のこと……………	一
二、綺麗に分り易く……………	三
三、正しい字と假名遣ひ……………	五
四、題名と書出し……………	六
五、詩・短歌・俳句の書き方……………	七
六、句讀點について……………	九
七、句讀點のうち方……………	一一
八、會話に括弧をつけよ……………	一三
九、節の初めは一字下げ……………	一四
一〇、括弧の使ひ方……………	一五

一一、ダツシユの使ひ方	一八
一二、點線「……」の使ひ方	二〇
一三、「!」「?」を使つた時	二三
一四、新聞の句讀點と符號	二五
一五、伏字と朱書き	二七
一六、丁附と綴ぢ方	二九
一七、住所氏名と雅號	三〇
一八、原稿の送り方	三三

附 録

誤りやすい假名遣ひ一覽……………

原稿の書き方

一、原稿紙のこと

自分の書いたものを、雑誌や新聞に投稿したり、懸賞募集に応募したり、又は印刷に附して出版したりするには、必ず原稿紙に書かなければならない。之はこの新聞雑誌でも投稿規定といふものがあつて、「投稿は二十字詰二十行の原稿紙を用ふべし」とか、「四百字詰原稿紙幾枚以内とす」とかいふやうに、明らかに定められてある。故に若したゞの白紙か罫紙に字數も行數もかまはず、普通の手紙でも書くやうに書流したのでは、その内容がどんなにいゝものであつても、規定違反として没書にされるにきまつてゐる。

そこで原稿紙であるが、之にはいろいろの種類がある。其中で先づ一般に用ひられるのは左の二種である。

二十字詰二十行(四百字詰) 20×20

二十字詰十行(二百字詰) 20×10

二十字詰といふのは、一行を二十の罫目に割つたもの、それを横に二十並べたのが即ち二十字詰二十行であるが、之には罫目一つに一字宛書いて合計四百字が入るので、四百字詰原稿紙ともいふのである。次の二十字詰十行は右の半分、即ち紙の大きさから云へば半紙半切れになつてゐて、字数は二百字である。

一般に原稿紙一枚と稱するのは、二十字詰二十行のものをいふので、之は原稿の枚数又は原稿料計算の單位になつてゐる。菊池寛氏が何かの折りに「俺の書いたものは一字十銭になるんだ」と言ふたといふ話があるが、之は同氏の原稿料が一枚四十圓としての一字當りの値段をいふたもので、此場合一枚といふのは即ち二十字詰二十行(四百字詰)のものを指すのである。二十字詰十行ものは二枚を以て一枚、即ち四百字になして計算するのは云ふまでもあるまい。

新聞社では新聞一頁が十三段、その一段の一行が十五字だから、原稿紙は十五字詰何行といふところだが、一分一刻を争ふ原稿を一字々々罫の目に入れて書いてゐては間に合はないから、多

くは罫も何もない粗末な洋紙の白紙を使つてゐる。そのため、ほぼ文字の大きさを一定して、大概一枚に四十字から五十字位書くことになつてゐるが、それが型にはまつてくれば、一人前の記者といつていゝ譯だ。然し勿論こんなのは社内だけのもので、社外からの投稿は必らず前にあげたやうな普通の原稿紙でなければならぬ。

近來しやれた詩集や文藝雑誌などで横組にしたのがあつた。原稿紙もちやんと横書きのができてゐるが、之は一部の文學青年や女學生などの間に流行してゐる繪模様入りか何かの、恐ろしく整澤な原稿紙と同様、道樂に用ふるといふなら兎も角、一般用としてはあまり褒めたものでない。

二、綺麗に分りやすく

さて原稿の書き方であるが、先づ第一に心掛くべきことは、字を綺麗に書くことである。尤も「綺麗に」といふのは、必ずしも「上手に」といふことではない。字の上手下手は致し方がないたゞはつきりと、あまりくづさず、一字一字、原稿紙の罫に入れて書く事である。

綺麗に書いてあれば、第一、読むにも評價するにも樂であるし、また印刷所に廻してからも、活字を拾つたり組版をしたり、校正をしたりするのに、どの位助かるか分らない。それが若し反對に、字の下手は兎も角として、ぞんざいに書きなぐつてなどあると、讀まぬ前からいやになり印刷の場合も非常に手数を増すものである。

何しろ新聞や雑誌の編輯者は、山のやうに集まつた原稿を短かい時間に調べあげるのだから、一つの原稿を何邊も繰返して讀むことをしない。否、しないではない、事實出來ないのだから、きたない、讀みにくい原稿だと一枚も見ないで——時には題名だけをみたゞけで没書にする。

この點において、文壇の耆宿島崎藤村氏や故有島武郎氏の原稿などは、實に理想的である。活版のやうな字で一字々々苟くもせず書いてある。これは一面、自分の作品に對する、また藝術に對する其人の敬虔な態度を現すものと言へる。況んや賣込の原稿などは、第一、見たところ綺麗で讀みよく出來てゐなければならぬ。歐米などでは、既に原稿は一々タイプライターで叩くやうに出來てゐる。

三、正しい字と假名遣ひ

次に心得べきは、正しい字、正しい假名遣ひを用ふる事である。編輯者や選評者の立場から云へば、それは「綺麗に」といふことにも増して重要さがあると言へる。何故なれば、假に其原稿が内容もいゝし、字も綺麗で申分ないから採擇しやうといふことになつても、澤山の誤字や間違つた假名遣ひがあれば、無論其まゝでは出せないから一々直すといふことになるが、そんな事はとてもして居れない。結局アツサリと没書にしてしまへといふことになる。といふと一見不親切のやうだが、前にも云つたやうに、短時間の中に澤山の原稿を取扱ふ者としては之も已むを得ないのである。故に自分の原稿が可愛いと思ふものは、自分で不確かだと思ふ字は、どんなに面倒でも一々辭書を引くことにし、假名遣ひは、之又辭書其他で研究して少しも間違ひのないやうにしなければならぬ。それには幸ひ本書の巻尾に、「誤りやすい假名遣ひ」の主なるものを掲げておいたから、直に利用されたい。

四、題名と書き出し

題名は原稿紙の初めから二行目、上から四字目位から書々下ろす。氏名(或は雅號)はその次の行即ち三行目の下方、氏名の一番下の字が、下から三番目の桁のところへ來る位に書き、本文はそれから一行おいて五行目位から書くのが體裁を得てゐる。

本文の書き出しは

夜	明	け	前						
				島	崎	藤	村		

靜の屋は別に觀山樓とも名づけてある。晴にも好く雨にも好い惠那山に連り續く山々、古代の旅人が越えて行つたといふ御坂の峠などは東南に聳えて、山の靜かさを愛するほど

右の見本にある通り、必らず一番上の一桁をあけて書くこと(之を一字下げといふ。)之に就ては第九項にも詳しく述べてあるから参照されたい。

詩・歌・俳句の書き方

詩や童謡などは題や氏名は、前の通りでいゝが、たゞ違つてゐる點は、書出したり各節の初めを一字下げにしないで、此見本通り各行の頭を揃へることである。

飛行機									
				石	川	啄	木		
見よ、今日も、	かの蒼空に								
飛行機の高く	飛べるを								
給仕づとめの	少年が								

人によつては、左の如く頭をでこぼこにして書くものもあるが、色紙などに書く場合は別として、原稿としては避けた方がいゝ。

かもめ、かもめ

去りゆくかもめ

かくもさみしくロずさみ

渚はてなくつたひゆく

短歌や俳句の場合も、やはり同様に書き下しにすべきである。

猶ほ注意して置きたいことは、何

の原稿にしる鉛筆書きや朱書きは絶

對に止すこと、假名は必ず平假名に

することである。格別の必要もなしに片假名書きにすることは、それが印刷される場合などに支

障を興へるだけである。片假名と平假名をまぜまぜに書くのは無論いけない。

障を興へるだけである。片假名と平假名をまぜまぜに書くのは無論いけない。

短歌	與謝野晶子
俳句	高濱虚子
縁の無き方に庭下駄新樹かな	
好き嫌ひなくて豆飯豆腐汁	
打水の水汲む井戸も夏の景	
船室の白と港の山映る鏡もさびし	皐月の七日
しき薄明の船	
うちつけにわが部屋の戸の鳴りいでて心さび	

六、句讀點についで

文章には、必ず區切れといふ者がある。そしてこの區切れのところは、ちよつと空いてゐるのが原則でなければならぬ。之は言はゞ呼吸のやうなものである。この自然的な區切れを無視して、のべたらに續けて書いてある文章は、第一、非常に読み悪く、息のつまるやうな感じを興へ人を疲勞せしむるものである。然しこの切目をたゞ空白にして置いても、言葉の切れ目か意味の切れ目か分らない場合がある。茲においてか必然的に「と」か「。」とかいふ句點が生れて來たので、文章を書く場合は、どうしても之を忘れてはならない。實際にどこの國の文章をみても、文明國の文章にこの句點のない事はない。今では、支那でも漢文にこの句點をつけて書くやうになつてゐる。

この句點、嚴格に云へば、「を讀點」、「を句點といふが、「は一句の中の意味のちよつと切れたところに、「は一句の中の意味が完了したところに付ける。左の如くである。

ドウニバー河の水は、照り續く八月の熱で煮え立つて、總ての濁つた複色の彩は影を潜め、
モネーの畫に見るやうな、強烈な單色ばかりが、海と空と船と人とを、めまぐるしい迄にあ
ざやかに染めて、その總てを眞夏の光が、押し包むやうに射して居る。丁度晝辨當時で太陽
は最頂、物の影が煎りつくやうに小さく濃く、それを見てすらきらきらと眼が痛む程の暑さ
であつた。

——有島武郎——

句點と讀點を取違へることによつて、意味が違つてくる場合がある。例へば、

ヤコフ・イリイツチは、徐ろに後ろを向いて、眠れる一群に眼をやると、振返つて私を顎で
しゃくつた。

「見ろい、イフヒムの奴を。知つてるか、癩癩玉つてんだ綽名が——」

此文章の中の「イフヒムの奴を」と「知つてるか」の下の點を、それ／＼置きかえてみると

「見ろい、イフヒムの奴を、知つてるか。癩癩玉つてんだ綽名が——」

となり、「知つてるか」は原文では綽名にかゝつてるのが、後では「イフヒムの奴」にかゝる
ことになつて、そこに可なり意味の違いを生じて來る。

次は、句點があるべくして無かつた場合、例へば「兄、弟を毆る」が、「兄弟を毆る」となつて
わたしたら、兄弟のものを他の者が毆つたやうにも取れて、本來の意味がハッキリ傳へられな
いことになる。

如何に句點の必要であるかといふことは、これだけでも分かると思ふが、さりとてあまり頻繁
にありすぎるのも、極めて見悪く、読みづらいものになる。ひどいになると、三四字書いては
句點、五六字書いては句點といふ工合ひに、まるで吃者がものを言ふてるやうなものもあるが、そ
んなのは、たゞ見にくく、読みづらゐばかりでなく、それを印刷に廻す場合には、必要な分を一つ
一つ消して行かねばならぬので、結局、面倒だから没書にしてしまへといふことになる。

七、句讀點のうち方

ところで茲に注意しなければならぬのは、原稿を書く場合の句讀點のうち方である。人による
と、文章に當然あるところの區切れを現はさず、即ち區切れのところは何等の餘地も残さず、の

べたらに書き續けて、句讀點だけを、區切れの最後の字のはいつてゐる罫の右下の隅、乃至は次の字との間の罫線の上に打つたりなどしてゐる。これは原稿整理の場合特に困る。

といふのは、一體、活字といふものは、綺麗に揃つて動かぬやう、土臺が四角に出来てゐるもので、しかも寸法がきまつてゐる。たとへ句點のやうな、表面小さなものでも、原則として一分の土臺をもつてゐるので、別の字の片隅になどはひる餘地は絶対にない。随つて、原稿の場合にも、文字にしる、句點にしる、その一つ一つが、原稿紙の一枚一枚にはひる勘定となるのである。それが、區切れのところに何等の餘地も設けず、句點だけ打つてあると、もし二十行二十字詰の原稿なら、一行に二つ平均の句點としても、一枚でも四十字即ち二行、十枚では二十行からの違ひとなつて来る。況んや、實際には、その幾つあるか分らない句點を、一つ一つ勘定するのは非常な煩累である。だから原稿を書く場合には、前にも言ふ如く、「句點も一字」といふ觀念をもつて、區切れの次の一枚を句點にあて、その罫の右上の方に「」なり。「」なりを打つのである。(次ぎの見本参照)

八、會話に括弧をつけよ

これも印刷された物を見ても分るやうに、原稿にも、會話には、初めと終りに必ず括弧をつけて置くべきである。

この括弧にもいろいろあるが、會話の場合は、角形、即ち見本に示すやうな「」か或は「」がよい。どちらかと言へば、單線の方が垢ぬけがして居てよい。人によると會話に括弧をつけず、

會話のはじめにだけ
——をつける人があ
る。之はフランス風
をまねたものだが、
地の文との混雜を招
き易いから、なるべ

その小さな正雄は、愛らしい子だった。彼
はもう八つになつてゐた。
「正ちゃんは、なぜ學校に行かないの。」
家で、いちんち遊んで暮すには大き過ぎた
彼を見て、人がよくさう訊ねた。

く括弧を用ふるがよい。この括弧も原稿に書く場合には、一つで一字分の勘定(即ち一桁をあて)にして書く。ただ會話などの最後に来る「。」と「」とは、二つで一字分にして一桁の中に書くのである。前頁見本三行目の終りがそれである。

九、節の初めは一字下げ

文章は、いゝ加減の節に切れてゐる方が読みよいものであり、更にその一節一節の初めの行が(一行で一節になつてゐる場合は勿論)一字下げになつてゐると、一層読みよく、體裁もよい。だから原稿でも、見本にある通り、節の初めは一字下げて書く。但し會話も節であるから、必ず別行にして書くが、初めに來る括弧は半桁分目に出來てゐて少し下るから、一桁目に書くこと、前頁見本の三行目の上方の通りである。

節を切るに就て戒むべきは、無意味に節を短くし、やたらに行を變へて、普通の文章を恰かも詩か俳句のやうな書き方をすることである。そんなのは、句讀點の多過ぎるのと同様頗る厄介な

お手數ものといふことになつて、その運命や知るべしである。

一〇、括弧の使い方

會話には必ず括弧をつけるべきこと、その括弧は「」や、もしくは『』がよいことは前項述べたが、括弧には、その外にもいろいろの形がある。即ち「」とか()とかであるが、「」は今はあまり一般に使用されない。どうかすると計表などに使用されてゐるのを見ることがある位である。もともと()の意味は變らないので、そうした括弧の必要な場合は、大抵()が用ひられてゐるのである。

それでこの丸括弧()は、どんな場合に用ひられるかといふに、多くは説明乃至註解、あるいは過去の會話、心もちを特に強めて具體的に表現する場合、などに使用される。

たとへば、説明の意味の場合で言ふと、

彼女は少し口籠つてから、「いゝえ。」と言つて、(その言葉は彼女の本心からはなかつた

けれども横を向いてしまった。さうするより外はなかつた。

とか、或は戯曲などと言ふと。

コルゼリヤ（ボートの方へ走り密つて）ボートの向ふに人がゐるのね。

ホレイ いや、チヤン（支那人）です。

とか、もしくは（前略）（後略）とかいふやうな事にも用ゐられ、また過去の會話の例で言ふと、

「で、僕が、（君もか？）と言ふと、次郎の奴、變な、驚いたやうな顔をして、（おれもだつたらどうする？）と、にらみ返しやがつたから、僕も……」

とか、又は、

軍務省はクルイレンコをペトログラドへ移送するやうに要求して來た。そこで彼は何の裁判も受けないで、勞兵會議の力で釋放されてしまつた。

（註）このクルイレンコは現在ロシア共和国の檢事總長となつてゐる。

とか言つた場合によく使用される。また心持を特に強めて表現する場合には、

（いや、これはどうしても俺の出る幕ぢやない！）彼はさう思つたので、わざと黙つてゐた。

とか、或は將來のこと、例へば誰かと逢ふ場合、その時起り得るであろう會話を豫想して、即ちその會話にこの（ ）を使用して心理を描寫するなり、作の効果を強めるなりする場合等にも使用される。だから普通の會話に此（ ）を使つたりすると、混亂を招き安いから注意すべきである。なほ會話の中で更に括弧をつけて書く場合がある。例へば特別の固有名詞とか、特殊の言葉とか、或は引用語とかを挿入する場合である。さういふ場合に、もし會話が單線の角括弧即ち「」で圍んであるならば、その中に挿入する括弧は複線の括弧すなはち「」で圍み、反對に、會話が複線で圍んであるならば、その中に挿入する括弧は單線のを使用する。

「僕は今度アプトン・シンクレアの『ポストン』を買つて見たが、彼はその序文の中で、彼の前者『石油！』が警官たちに騒がれたため、却つて賣行がよかつたことをあげ、「作者は自費出版者として、過去二十五年間印刷業者に借りた負債を初めて拂ひ得たといふ事實を、これらの警官たちに感謝しなければならぬ。」と皮肉を言つてゐる。」

といふ風を書くのである。この方式は、前にあげた過去の會話の例にも應用する事が出来る。即ち丸括弧の代りに、何れか反對の角括弧を使用してもよい。

一、ダツシユの使ひ方

これもいろいろの場合に使用される。前に述べたやうに、會話に括弧をつけないで、その會話の初めにだけ、この——を一つ一つ著ける人がある。これは詩などの中ではあつてもよいが、散文の中では、地の文との區別があいまいになり易く、やはり會話には角括弧の方が読みよい。それから文中に、この——を前後につけて（ ）と同じく説明などの場合に使用する事がある。これは其人の好みでどちらでもよい。しかし戯曲や、過去の會話や、註などの場合に用ふるには不向きである。さういふ場合には、やはり前の見本に示すやうな（ ）がよい。

この——を「即ち」とか「言ひ換ゆれば」とか、乃至は次ぎに来る字を特に注意させるやうな意味で用ふる人がある。

そこには堂宇、邸宅、酒、女—人生のすべてがある！
とか、或は、

胸の中を柔かい鳥の羽でそくられるやうな歡樂—
かすかな悲哀を交へた歡樂が湧いて、
いつまでも云々

とか、または、

聯合諸國はロシアの單獨講和が彼等にとつて—
破滅であることをよく知つてゐる。

とかいふ如きその例である。第一の例などは、「即ち」を略して適切である。第二の例も、言葉を重ねて意味を強め複雑にしたもので、必ずしも、——でなくとも句點でも濟むけれども、あつても悪くはない。しかし第三例に見るやうな、——の使ひ方は一般的でなく、むしろ其人の癖と言つてよい。なぜなら右のやうな場合に、わざわざ、——を使つて、無理に注意を喚び起さなくとも、その言葉の重要性に依つて、人は十分その點に注意するからである。

なほまた言葉の始めや語尾にこの——をつけた例もすくなくない。さういふ中には、ダツシユをつける必要がないか、或は點線を用ふる方がむしろ適當なと思はれる物がよくある。

要するに、この——を使つた場合はいろいろあるが、これは括弧と違つて、どうしても之を使はなければならぬといふやうな場合は割に少い。勿論使つて悪い事はないが、投書家などの中に

は、やたらに之を使ひたがる人があるので、さういふ人は十分注意して使用されたいものである。この問題は印刷面の美観といふ事からも考へなければならぬ。即ちこの——が多いと、變に眼障りになつて、印刷面がすつきりしないものである。勿論必要な場合は使はねばならぬが、今いふやうに是非とも使はねばならぬとか、使つた方がよりいゝといふ場合はむしろ少いから、好んで使用しないやうにしたい。

二、點線「……」の使ひ方

この點線も、ダツシユ即ち——と同様、やたらに使用すべきものではない。ダツシユや點線を使はないと、文章に新味がないかのやうに思つて、好んでこのトリツクを用ふる人があるが、これは文章道から言へば末技に過ぎない。けれども點線も用ひ方によつては、必ずしも排斥すべきものでなく、またむしろ必要な場合、有効な場合がある。

では、どんな場合必要であり、有効であるかといふに、主として感情の緊張、言葉の餘韻、乃

至は言葉の斷續、沈黙等を現はす場合によく使はれる。

「……勇吉！ 宥してくれ！ 俺れが悪かつた！……」

右の會話の場合、はじめの點線は感情の緊張をあらはすのである。即ち感情が高調に達して、萬感こもごもといつたうちに、突如ことばが口を突いて出る前の、緊張した感じを出してゐる。それから「悪かつた」の次に來る點線は「！」と共に、感情の緊張の連続と、やゝそれが崩れかけた時の餘韻をあらはしてゐるので、かういふ場合には點線も必要であり、感情の表現に有効な働きをしてゐると言へる。

「でも……は、いえ……その……江戸から……許しがありませんので……」と、吉兵衛はもちもち、そして微笑しながら、例の通り言ひわけを始めた。

この場合の點線は、言葉の斷續をあらはすもので、何かおつおつと辯解でもするやうな時の氣持なり、動作なりを現はす場合には、用ひて適切といふことが出来る。

「彼はもう自分の力のかなはない事を知つた。で、齒を食ひしぼりながら、今に見るとばかり我慢した、ちつと、ちつと……」

この場合の点線は餘韻をあらはすものである。これは、「ちつと我慢した。」と書いてもよいのであるが、見本どほり「我慢した、ちつと、ちつと……」と書く方が、意味が強くなる。どつちがよいといふことは、無論場合々々によつて違ふので、強く表現する必要のある場合は、見本のやうな書き方をするのもよいし、さうでない場合は、またそれぞれの言ひあらはし方があるわけである。こゝではたゞ点線の使ひ方の一例として擧げたにすぎない。また右の場合、「ちつと、ちつと。」と、切つてしまつても意味は通ずるし、間違ひでもないが、「ちつと……」と、点線をつける方が、感情を讀者に誘導するに自然なところがある。

「……」 俊吉は口惜しかつたが、氣の弱い彼は、唯面を伏せてゐるばかりだつた。

こんな風に、會話の場合、一方の相手が黙つてゐる時の情景をあらはすのにも用ひられる。然しこれもそちらに何度も繰り返されると、うるさくもあるし、單調にもなり、表現の技巧として至つてゐるとは言へない。だから何度も黙つてゐる場合は、点線を用ふると共に、「沈黙」といふやうな文字や、或は他の動作の表現によつて、沈黙の意味を表現すべきである。文章はさういふ點でも大に修業が必要である。

「！」「？」を使った時

こゝでは、この二つの符號が、それぞれ何を意味するかを説明しようとは無論おもはない。それは餘りに分りきつたことである。従つて、それ等が如何なる場合に使用されるかといふことを説くのも、固より無意義でなければならぬ。それはまた自から「文章の書き方」に屬することであつて、「原稿の書き方」に關する事ではなす。

たゞこれが西洋語の輸入につれて、日本の文章の上によく用ゐられるやうになつたので、印刷面の體裁ならびに感じの上から、従つて原稿に書く場合に、ちよつと注意して貰ひたい事があるのである。

元來この「！」にしろ「？」にしろ、西洋の文章の中に使つてあるやうに、言葉の切れめに、これが必要な場合つけてあるのである。そしてこの「！」なり「？」なりをつけたあとには、「、」^{コンマ}や「。」^{ピリオド}はついてない。實際またその必要はないのである。然るにそれが日本文の中に書かれた

場合を見ると、往々にして、

「いよう！、これはく！、どうしたんだ今頃？」

などと、句點の蛇足を附してある。かういふ書き方はよくない。然しさうかと言って、

「いよう！これはく！どうしたんだい今頃？」

といふやうに、次の言葉との間を、くつつけてしまつてもよくない。(事實、原稿にかうした書き方をする人がよくある。)なぜかといふに、前にも説いたやうに、文章には必ず區切れといふものがあつて、呼吸のやうに、そこがちよつと空白になつてゐるのが原則である。然したゞ空白にして置いても、言葉の切れ目か意味の切れ目か分ないから、「や」の句點をつけることも前に説いた通りである。然るに「や」の場合には意味の切れ目であるが、「！」や「？」は既に西洋の例でも述べたやうに。「の代りをしてゐるので、「は勿論」。」をつける必要はない。従つて「！」や「？」をつけた場合は、

「いよう！これはく！どうしたんだい今頃？」

といふやうな書き方(即ち「！」や「？」の下を一桁だけあける)をすべきである。その方がちよつと

呼吸がはひつて面白く、感じも自然である。

但し、會話などで最後に括弧のある場合は、「？」と下括弧との間を一桁も空白にすると、括弧の下の餘白の爲に間がぬけるし、會話の切れ目といふ感じがびんと來ないから、右の例に示すごとく「？」と下括弧とをくつつけて書く。くつつけて書いても、下に餘白があるから少しも不自然ではない。最後に「！」の來た場合も、右と同様である。

尙「！」なり「？」なりの次に、「！」なり「……」なりが來る場合はどう書くかといふに、「！」なり「……」なりは、「！」なり「？」なりを語尾とする意味の連続であり、同時に空白に代るものであるから、間をあける必要はない。點線の場合の例でも示したやうに、

「おれが悪かつた！……」

といふ風に書くのである。「？」の場合もこれと同様である。

一四、新聞の句讀點と符號

新聞記事にある句讀點や符號の使用法は、本書に述べたのと少し違つてゐる。参考のため左にその一斑を掲げて置くから、日々の新聞記事と對照して其要領を得られたい。

句 讀 法

- 一、原則として、殆んど句讀點を用ひない。たゞ一節の中で、句點「。」を打つべきところだけに、句點「。」の代りに讀點「、」を用ひる。
- 一、段落即ち一節の最終には、句點も讀點も用ひない。
- 一、中に（ ）や▲○等が入る場合は、句讀點を用ひない。
- 一、二つ以上の人名、地名、名詞、數字等が重なるときは、各々の間に讀點「、」をつける。

符 號

感歎符「！」疑問符「？」等は、見出し（標題）などの外、普通記事中には、みだりに用ひない。

SM.10。

一 般 的 規 定

- 一、原稿には、青インキか濃い鉛筆を用ひること。

- 二、楷書または分りやすい行書で書くこと。
 - 三、紛らわしい文字は、ハッキリと書くこと。數字や固有名詞は特にハッキリ書くこと。
 - 四、読み方の分りにくい固有名詞には、振假名をつけること。
 - 五、書きかへや、書き入れを多くせぬこと。
 - 六、一枚の紙に二つ以上の記事を書かぬこと。
 - 七、ページごとに一定の個所に丁數をつけ、その丁數を圓でかこぶこと。
 - 八、脱稿後に読みかへすこと。
 - 九、おのれの筆癖をかへりみること。
- この一般的規定の中で、二、三、五、八、九などの諸項は、新聞記者ならずとも、大いに服膺すべき點である。

一五、伏字と朱書き

以上で、ほと「書き方」の大體を盡したので、最後に、投書家の心得ともいふべき、二三の事項について説明を試みることにする。

投書家の中には、原稿の所々を伏字にしたものや、自分で縦横に朱筆を加へたものを寄越すものがあるが、勿論何れも宜しくない。

伏字といふものは、例へば、非常に露骨なエロチックな描寫とか、または危険思想を含んだ部分とかで、其まゝ公表したのでは、法規に抵觸する恐れある場合に、編輯者や出版者に於て、その部分だけを○又は△にするものであつて、筆者自身の爲すべきものでない。

嚴格に云へば、伏字のある原稿は、第一、読めもしないし、従つて採否の判断もつけられないといふことが云へるので、没書にされても致方がない。否、寧ろ没書にされるのが當然で、云はゞ、筆者自身で自分の原稿を没書籠に追ひやつてゐるやうなものである。

次に朱筆を加へること。之は自分で自分の原稿を印刷に附するとか、又は自分の手許にしまつて置くとかいふ際には、如何に朱筆を入れやうが、一向に差支へないことであろうが、苟くも新聞雑誌に投稿し、又は他に添削を乞ふとかする場合には、絶対に慎しむべきである。若し書き上

げた後で修正したい個所を見出した場合には、やはり同じインクで訂正すべきである。但しそれとても、あまり度を過ぎるのは宜しくない。有名な文豪や詩人の原稿で、それこそ紙の生地も見えない位に加筆したのがある。それは所謂巨匠苦心の跡を物語るもので、お互ひの大に學ぶべき點であるが、然し、だからと云つて、やたらに其真似をして、平氣で汚ない原稿を寄せることは殊に初心者としては、たしなみたものである。

一六、丁附と綴り方

原稿には必らず、一枚々々に丁數を入れることを忘れてはならない。其場所は見安いところ、

例へば、欄外上方の右か左——普通原稿紙にはそこらに、と刷込んである——に書いておけば宜しい。人によつては、四百字詰原稿紙を二つに折つて、書籍の頁附のやうに両面に丁數を書入れるものもあるが、それは宜しくない。何故ならば、丁附なるものは、先後の順序を示すのみでなく、枚數を知るためのものでもあるから、やはり一枚一枚に一箇所でなければならぬ。

丁附には、西洋數字か日本の數字を用ふるのが普通で、「ABC」とかアラビア數字などを使用するのは、實用的でないばかりでなく、何となく氣障に見えるものである。次に原稿は、二三枚以上になれば必ず綴じておかねばならぬ。それには、事務用の紙綴器を使つたり、しやれたりボンや色糸を用ひたりするものもあるが、何れも面白くない。やはり小さい紙綴かピン又はクリップで、右の上部を軽く綴じておくに限る。蓋し原稿は編輯者若くは印刷所で、バラ／＼に引離すこともあるから、あまり頑丈にしたり、一枚々々を糊付けにしたりするのは、無用のわざである。

一七、住所氏名と雅號

投稿には、必ず筆者の住所氏名を明記すること。之は重要な條件の一つである。其の場所はやはり題の次であるが、若し其所は雅號だけにする場合は、最初の一枚目の欄外右方か、さもなくば最後の餘白か欄外左方でもよい。

投書家の中には、雅號だけを書いてすまじこんでる者もあるが、知名の人ならいざ知らず、そうでないものは、結局誰の原稿か分らず仕舞になる場合が多い。たとへ雅號で通つてゐるにしても、當事者で一々其住所氏名まで記憶してゐる者は先づ無いと云つていゝから、照會を要するか、又は返稿する場合など、差詰め支障を來たすことになる。こつちふ事はよくあることで、歸するところ、投書者自身の損といふことになる。

雅號といふことが出た序に言ふておくが、近來は左程でもないが、まだ初心の人々の間には、雅號だのペンネームだのいふものに、頻りにこだはつてゐるものがある。

一體雅號なるものは、例へば尾崎紅葉とか、坪内逍遙とか、または長谷川如是閑とかいふやうに、自分の好み、理想、信仰といつたやうなものを取つて筆名にするもので、別段悪いことでもないが、本名を出しては都合が悪いやうな場合に、匿名すなはち隠し名を用ふるのは別として、こつちふ事に氣をとられることは、あまり感心しない。殊に、意味も何もない、でたらめの名をくつ／＼けるのは、却つて人柄にもかゝはるといふものだ。どつちかと云へば、名前などは何うでもいゝ筈だ。

一八、原稿の送り方

原稿の郵送には、「開き封」と稱し、封筒の口を左圖の如く少しばかり切取るか、または糊づけにしないで紙縫か何かで括つて、何時でも中味が覗けるやうにして置けば、第四種郵便として、三十匁まで二錢、それ以上は三十匁又はその端數ごとに二錢増しで宜い。これだと普通の四百字詰原稿紙なら三十枚位までは、大概二錢切手一枚でいゝやうである。

東京市澁谷區伊達町四三

中正社御中

(原稿在中)

この點線の分ぐらい切取る事

但しこの第四種郵便には、絶対に信書即ち手紙を同封してはならない。若し、例へば、「これ

〳〵の原稿を送りますから、是非採擇を願ひたい」とか、「宜しく御指導のほど御願ひします」とかの文句を、別の紙に書いて同封するか、又は原稿の餘白に書き込むかしてあると、其都度不足税を徴收される。之は徴收される側でも迷惑だが、郵便局でも手數がかゝるため甚く嫌ふやうである。

ところが、中にはまた、普通の信書同様に密封して、澤山の切手を貼るものや、わざ〳〵書留にするものもあるが、之等は云はゞ無駄な失費で、そうまでする必要はない。

録附 誤りやすい假名遣ひ一覽 —いろは順—

【い】

【正】 います
さいはひ (幸)
ついで (序)
むくい (報)
やいば (刃)
ひいき (最負)
おい (老)

【誤】

みます
さひはひ
つひで
むくむ
やひば
ひみき
おひ

【は】

【正】 けはしい (險)
くは (桑・楸)
いたはる (勞)
かはいがる
きはどい

【正】

こはい (恐)
こはす (壞)
さはる (障・觸)
せはしい (忙)
やはらか (柔)
まはす (廻)

【誤】

こわい
こわす
さわる
せわしい
やわらか
まわす
こほる (凍)
もよほす (催)
たへる (堪)
たへる (湛・稱)
たへ

【ち】

【正】 いぢめる (虐)
いぢる (弄)
くぢら (鯨)
とぢる (閉・綴)
けぢめ (區別)
すぢ (筋)
ぢつと (擬)
ふぢ (藤)

【正】

いじめる
いじる
くじら
とじら
けじめ
すじ
じつと
ふじ
かをる (薰・香)
しをらしい (徐)
をか (岡・丘)

【誤】

【わ】

【正】 をがむ (拜)
をこがましい (幼)
をさく (教)
をしへる (教)
をしむ (惜)
をとこ (男)
をとめ (少女)
をんな (女)
をば (伯・叔母)
をぢ (伯・叔父)
をつと (夫)
をひ (甥)
をのゝく (戰)
をどる (踊・躍)
を (牡・男・雄・尾・小)

【わ】

【誤】 おがむ
おこがましい
おさない
おしへる
おしむ
おとこ
おとめ
おんな
おば
おぢ
おつと
おひ
おのゝく
おどる
お

【よ】

【正】 かわく (乾)
ことわり (斷)
さわぐ (騒)
さわやか (爽)
たわいない (弱)
よわい (弱)

【誤】

かはく
ことはり
さはぐ
さはやか
たはいない
よはい
よう (見ようと思ふ
明日は出来よう) やう
わづらふ (患)
くづ (屑)
たづさはる (携)
はづれる (外)
わづか (僅)

【う】

【正】 まうす (申)
ゆうべ (昨夜)

【誤】

まふす
ゆふべ

【る】

【正】 くらゐ (位)
くれなゐ (紅)
まゐる (參)
もとゐ (基)
ゐなか (田舎)

【や】

【正】 やう (花のやうに
しやうがない) やう

【ま】

【正】 まうづ (詣)
まうける (設・儲)
あふぐ (仰)
あふる (呷・煽)

【え】

【正】 きこえる (聞)
きえる (消)

【誤】

きこへる
きへる

369

238

こえる (肥・越) こへる
 さえる (牙) さへる
 おびえる (怯) おびへる
 あまえる (甘) あまへる
 おぼえる (覺) おぼへる
 たえる (斷・絶) たへる
 はえる (榮・生・映) はへる
 ふえる (殖) ふへる
 まみえる (見) まみへる
 みえる (見) みへる
 ひえる (冷) ひへる

すゐ (末) すへ
 すゑる (据) すへる
 こゑ (聲) こへ
 ゆゑ (故) ゆへ
 ゑがく (畫) えがく
 ゑふ (醉) えふ

あひだ (間) あいだ
 うひ (初) うい
 しひて (強) しいて
 ちひさい (小) ちいさい
 よはひ (齡) よはい
 つどひ (集) つどい

はず (筭) はず
 はずみ (機) はずみ
 ひきずる (引摺) ひきづる
 はずむ はずむ

記... 名... 稱... 一... 覽

テ ン (讀點)
 シロマル (句點)
 クロマル
 カ ギ (單線角括弧)
 フタヘカギ (複線角括弧)
 カ ッ コ (括弧)
 ! エツキスクラメーシヨ
 ン・マ一ク (感歎符)
 ? インタロゲーシヨ ン・マ
 一ク (疑問符)
 … ドツテツドライン
 (ぼちく又は點線)
 | ダツシユ
 || パラレル

昭和十年九月十日印刷
 昭和十年九月十五日發行

【定價四拾錢】

不許
 複製

著作者 東京市澁谷區伊達町四三 森 衛
 發行者 東京市牛込區早稻田鶴卷町三九一 小 磯 茂
 印刷者 東京市牛込區早稻田鶴卷町三九一 新生社印刷所
 印刷所 東京市牛込區早稻田鶴卷町三九一 新生社印刷所

附典「方き書の稿原」
 編一第書叢年青學文

發行所 中

東京市澁谷區伊達町四三
 振替東京三六九三四番

終

